

近代的自然観への反省

——現代における自然破壊・汚染の原点——

朝 倉 哲 夫

はじめに

公害（自然破壊・環境破壊）という問題を生み出し公害に悩む現代人のイメージには、身寄のない母親をいじめて小遣をせびっている親不孝なドラ息子のイメージを思わせるものがある。しかも、この親不孝なドラ息子の心理には一方では母親に対して甘えていながら、他方では母親を搾取するという心理的陰影がみとめられるのである。丁度これと同じように、現在盛んに自然破壊や汚染を推進しつつある現代人が、自然に対して抱く心理の中にもまさに同じような心理的屈折がみてとれるのではないかと感じられる。つまり一方では、自然に対する限りない甘えがみられると同時に、他方では自然をあくなく搾取するという心理的屈折がある。現代人の自然に対するこうした甘えと搾取。現代における公害の問題は、このような現代人の自然に対する心理的態度の中に端的に胚胎していた問題ではないかと考えられるのである。しかも、こうした心理的態度は近代の自然観によって多少なりとも育成されたものなのではないかと思われる。何故であろうか。このように問うとき、私たちは必然的に近代における自然観の問題に当面せざるをえなくなるのである。

さて近代の自然観としては、端的に言って、次にみるような二つの相反する自然観が存在していたのではないかと

考えられる。その一つは、自然こそはまさに人間生存の基盤をなすものとして、人間をその懷の中にやさしく抱いてくれるものとする「母なる自然」という自然観（調和の自然観）であり、もう一つはベーコンやデカルトなどの発想にみられた如く、人間と自然との間に対立を前提した上で、しかも人間による自然の支配征服は人間自由の伸長を意味するものとして端的に善であるとする自然観（対立の自然観）との、こうした二つの自然観である。この場合、前者の「母なる自然」という自然観は、直截にいつて、近代人並びに現代人に対して暗黙のうちに自然に対する甘えの態度を形成してきた根拠となったものではないかと考えられるのである。例えば、ごく最近まで私たちには余りにもなじみの深かった「自然はどんなに虐待しても人間に恩恵を与えてくれる」といった自然に対するものの見方。或はまた、自然の浄化能力に対する限らない過信やタレ流しの問題など。以上におけるこのような自然に対するものの見方、考え方は端的に自然に対する甘えの態度から、つまり「母なる自然」という自然に対する甘えの自然観（ロマンチズム）によって醸成されてきたものではないかと考えるのである。

さてそれでは、この「母なる自然」という自然観に対して、近代におけるいま一つの自然観即ち、人間と自然との間に対立を前提とする「対立の自然観」とはどのようなものであったのかというと、それは積極的にまた直接的に自然支配や自然搾取の論理をうち出す自然観であったといえよう。それは確かに近代史の流れの中においては、最初のうちはまさに微々たる傍流的なものに過ぎなかったものであるが、近代史の流れがカール・ヤスパースのいうように「誤れる啓蒙」*falsche Aufklärung*の道（それは科学・技術に基礎をおく技術的悟性絶対化の道であった）を歩んだことと並行して、次第に近代における大きな主流的な自然観となっていくたものである。それと同時に、「科学・技術による自然の支配征服は善である」とする考え方や、また「人間は自然の主人公である」という考え方が広く一般的に浸透することになったのである。

ところで、現代における自然破壊や汚染という極めて深刻な問題には、如何にこうした考え方が、つまり「科学・技術による自然の支配征服は善である」とする考え方や、また「人間は自然の主人公である」といった思いあがった考え方が、大きな推進力となっていたかということは十分に注意しておかなくてはならないことであろう。それはまさしく、現代の公害問題における元凶的なものの見方、考え方であるといえることなのである。しかもそれと同時に忘れられてならないことは、こうしたものの見方、考え方が、側面的には「母なる自然」という自然に対する甘えの態度が根底に存在したことによって、却って逆に補強されてきたのではないかということなのである。別言するならば、近代における「対立の自然観」という自然支配を善なりとする考え方が、確かに現代の公害（自然破壊や汚染）を生み出す元凶的な自然観であったといえることなのであるが、しかしそれと同時に、側面的にそれを援助してきたものは、いま一つの近代的自然観であった「母なる自然」という自然に対する甘えの考え方ではなかったかということなのである。とするならば近代における二つの相反する自然観は、端的にいつて、相補的に現代における公害問題の原点をなすものであったといえることであろう。それ故に、ここに相反する二つの近代の自然観をとりあげて、それらの批判をいささかながら試みてみようと思ひ立つた所以なのである。

(一) 「母なる自然」という自然観

カトリックの神学者であるローマ・グアルディーニ Romano Guardini (1885～) は、近代における自然観の主流が「母なる自然」としての「調和の自然観」有機的自然観であったということを、端的に次のように指摘している。

「ジョルダーノ・ブルーノやモンテニユ、ルソーやスピノザ、ゲーテやヘルダーリン、さらには十九世紀末葉の唯

物論者でさえもが、『自然』という言葉を次のように理解していたのである。それは人間が身近で出会うものを基礎として、そこから次第に大きな連関へと広がっていく、事物や事象の総体なのであると。それは、天与のままの形態や経過からなる構造であり、人間とはなにかむつまじい間柄にあった。自然はすぐそこにあつて、人をこころよく迎え入れてくれると共に、いきいきとひとの経験の中に入ってきた。……それは『母なる自然』と呼びかけられるほどに人間と通じあっていたのである⁽¹⁾（傍点は筆者）と。

グアルデイーニの以上のような指摘からも窺えるように、ルネッサンス期哲学の代表者であるジョルダノ・ブルノから十九世紀末葉の唯物論者に至るまで、広く一般に近代人にとっては「自然」とは「母なる自然」のことなのであり、「それは人間が全幅の信頼感をもって身を託しうるもの⁽²⁾」という意味に考えられていたのであった。それは、別言するなら、「人間を調和をもつて包摂するもの」、また「人間にこころよく恩恵を与えてくれるもの」という意味において、自然と人間との間に調和をみる「調和の自然観」であつたといえるであろう。

ところでグアルデイーニの指摘する処によれば、この「母なる自然」という近代的自然観には、次にみるような二つの基本的な概念がひめられていたことであるという。その一つは、自然は「天与のままの存在である⁽³⁾」と考えられていたということ。その二つは、自然は一種の「価値概念⁽⁴⁾」として、つまりそれは「正しいもの、健全なもの、完璧なものとして、一切の認識や創造に枠を与える規範である」と考えられていたということ。以上、こうした二つの基本的な概念がである。それでは先ず初めに「天与のままの存在」とは、一体どういうことなのかということを問うことから始めよう。これに対してグアルデイーニは、端的に次のように答えていたのである。それは「人間がそれに手を加える先からあつた事物の総和、エネルギーと物質、実体と法則の総体である。この全体を近代人は次のように受けとっていたのである。これは自己が存在していることの基盤であり、自己が認識し創造する場合の課題なのであ

る」⁽⁵⁾と。(傍点は筆者)別言するなら、それはまさに人間が生存していくことの基盤として、また人間が認識し創造する場合の課題として、「人間が全幅の信頼感をもってそこに身を託していられるもの」⁽⁶⁾であったといえるであろう。それはまさしく、ゲーテの語っていたように、「おお自然！彼女はわれわれをまわりから包みこみ、しっかりと抱いている」⁽⁷⁾という如きものであったと思われるのである。

それでは次に、自然が一種の「価値概念」であったとはどういうことなのか、ということ問うことにしよう。グアルディーニは、これに対しても、端的に次のように答えていたのであった。「それは正しいもの、健全なもの、完璧なものとして、一切の認識や創造に枠を与えている規範、あの『自然的なもの』でもあった。ここから、模範的存在についての尺度がうまれる。十六世紀から二十世紀に至るまで妥当していた自然的人間、自然的な社会や国家形態、自然的な教育や生活方法がそれである。それを例示すると、十六、十七世紀の『端正な人』*honnête homme* ルソーのいう自然的な人間、啓蒙主義の合理性、古典主義の自然にして美なるものなどの概念があげられるのである」⁽⁸⁾と。別言するなら、価値概念としての自然とは、一切の認識や創造に枠を与えている規範として、それはまさに「神聖なもの、敬虔的なものであった」といえるであろう。それはまさしく、自然＝神として、端的に宗教的な崇拜の対象と考えられていたものなのであり、自然は創造力に富むと同時に、また賢明で恵み深いものとしてとらえられていたものであったと思われるのである。

とするならば、以上においてみてきたように、「母なる自然」という自然観は人間と自然との間に一体感、調和感を抱かせるものとして、まことにロマンティックな自然観であったと考えられる反面、それはまた人間の自然に対する態度において甘えの態度を形成するものではなかったかと思われるのである。何故ならば、それはグアルディーニも既に指摘していたように、近代における「母なる自然」という概念が、一つには「天与のままの存在」として「人

間が全幅の信頼感をもってそこに身を託していられるようなもの」であったということ。次には自然が一種の価値概念」として、「それは正しいもの、健全なもの、完璧なものとして、一切の認識や創造に枠を与える規範」であったということ。以上のこうした自然に対する二つの考え方を顧みてみるならば、そこに明らかに「自然にまかせておけば、また自然に頼っていれば、万事はうまくいくであろう」とする、自然に対する甘えの心理的態度が端的に看取されうることであらうと考えるからに外ならない。そしてこうした自然に対する甘えの態度が、間接的であるにせよ、（直接的には、自然支配を善なりと考える、いま一つの近代的自然観、つまり「対立の自然観」が問題なのであった）現代における自然破壊や汚染の問題に一役買っていたことに十分注意しておかなくてはなるまいと思念するのである。何故なら、自然破壊や汚染を行なう態度の根底には、端的にいつて、「自然はどんなに虐待しても、恩恵深いものであるから許してくれる」という自然に対する甘えの態度がひめられていたと推察するからに外ならない。

以上においてみてきたいように、近代における自然観の一つの大きな流れは「母なる自然」という自然観であったのであるが、ここで特に注目しておかなくてはならないことは、あのグアルディーニが、こうした「母なる自然」という自然観に対して、「しばらく以前から自然に対する関係に変化がみえ始めているとして」、直截に次のように指摘していたことである。

「わたくしの見方に誤りがなければ、しばらく以前から――およそ三十年ほど前から――自然に対する関係に変化がみえている。人間の実感にとつて、自然はもはやわが身を託しきれるような、驚嘆すべき豊かなもの、調和をもって包摂するもの、たくみに秩序づけられたもの、こころよく恩恵を与えてくれるものではなくなった。人間はもはや『母なる自然』について語ることはないであらう。むしろ自然は、人間にとつて何か心を許せないもの、危険なものに映っているのである」⁽⁹⁾（傍点は筆者）と。

こうしたグアルディーニの指摘のなかに、私たちは端的に近代における自然観が「母なる自然観」から「対立の自然観」へと推移したことの結果をみてとれるのではないかと考えるのである。より正確にいうならば、近代における自然観としては確かに「母なる自然観」と「対立の自然観」という二つの自然観が存在していたことなのであるが、近代ヨーロッパの歴史がヤスパースのいう「誤れる啓蒙」の道を歩んだことも並行して、「対立の自然観」が「母なる自然観」にとって代って支配的となったことの結果が、このような結末をもたらしたのではなからうかと考えるのである。何故であったからであろうか。

(二) 「誤れる啓蒙」ということ

ヤスパースは「啓蒙」ということに関して、次のような二つの意味を区別している。「真なる啓蒙」 *wahre Aufklärung* と「誤れる啓蒙」 *falsche Aufklärung* との二つにである。彼によれば「真なる啓蒙」とは、科学的な対象的知識の限界を指示するものとして、従ってそれは信仰とか或はまた悟性的知識の諸前提がそこにおいて成立しているところの包括者 *das Umgreifende* の承認に導くものであったのに対して、「誤れる啓蒙」とは、およそこうしたことがなく、まさしく浅薄極まりない態度であらゆるものを科学的な悟性的知識のうちに解消し尽してしまおうとする、悪しき科学万能主義のことをいうのであった。その結果は当然のことながら無信仰を招来したことである。それ故ヤスパースも、「無信仰は啓蒙（誤れる啓蒙の意味、筆者）の結果と考えられる」と指摘していたのである。というのも、それは十九世紀以後の現代科学が、この「誤れる啓蒙」ということによって、信仰という根から離れた根なし草となってしまったからに外ならない。そこからまた、ヤスパースは「現代科学は端的に破壊的であるのであって、それは不吉な世界危機の単なる史的現象なのである」⁽¹¹⁾（傍点は筆者）と語って、科学・技術による今日の諸々の

窮境（自然破壊や汚染の問題を含めて）を既に予想していたことなのである。

補論。ヤスパースによれば、近代科学の根底には次のような三つの根本動機がひそんでいたことであるという。その一つは創造神の思想であり、その二は神義論的に神と闘争するという態度であり、その三は神から命ぜられた無制約的な真実性が認識をもつて単なる閑暇の遊戯とみなすことなく、召命による真剣な事柄であるともみなす態度の、⁽¹²⁾ こうした三つの動機がである。近代科学は十四世紀の頃に、（特にオッカム派のスコラ哲学に関して）即ち信仰が動揺し始めたけれど、しかも未だ無力化しない時代に発生したのであったが、しかし近代が「誤れる啓蒙」の道を歩んだことによって、十九世紀には、この近代科学を支えていた創造神が死んでしまったのである。これと同時に、近代科学を導いてきた三つの動機も消滅することになり、そこから真の科学的精神が喪失せられると共に、目標喪失のままに単なる技術上の發明発見のみが追求されることになってしまったのである。別言するなら現代科学はまさにニヒリズムの上に、単なる技術上の發明発見を追求するという危機を招来しているといえるであろう。

それでは、このような無信仰を招来し、また単に破壊的であるような現代科学を結果させた「誤れる啓蒙」とは一体どのような性格のものであったのだろうか。それについて、いま少し詳論しておく必要があるであろう。

さてヤスパースは、それに関して次のように指摘している。「誤れる啓蒙 *falsche Aufklärung* とは、あらゆる知と意欲と行為とを単なる悟性に基づかしめることができると考える。こうした誤れる啓蒙は、単に常に特殊である悟性的知識に許された領域内で、この悟性的認識を有意義に応用する代りに、このような悟性的認識を絶対化するのである。こうした啓蒙は、個人を誘惑して（共同的に問い且つ促進する知の生ける関連を基礎としないで）あたかも個人が一切であるかのように、自分自身だけで知ることができ、自分の知だけに基づいて行動することができるような口吻をする。人間生活は、すべて例外と權威の両者によって定位されねばならないのであるが、こうした誤れる啓蒙には、この例外と權威に対する感受性が欠けているのである。要するに、こうした啓蒙は、真なるものと人間にとって重要なものをすべて、悟性の洞察によって獲得できるかのように人間をして自己自身の上に立脚せしめようとす

るのである。このような啓蒙は、単に知らうとするだけで、信じようとはしないのである。⁽¹³⁾」(傍点は筆者)と。

私たちは彼のいうこうした「誤れる啓蒙」ということの規定のなかに、端的に「科学的、技術的悟性の絶対化」ということと、また「人間をして自分自身のみに立脚」せしめようとする近代人の「ヒュブリス」という問題を察知しうることであろう。そしてこうしたことが、無信仰という問題と、また目標喪失による現代科学の破壊性という問題を端的に結果することになったのであらうと考えるのである。ところでヤスパースは、上記のこうした二つの問題に關係して、その直接的な原因として特にデカルトの名を指名していたことなのである。

補論。さて、まずヤスパースは、近代人が超越者や他者の存在をおよそ顧みることなく、「自分のみが一切である」とするような「ヒュブリス」(従つてそれはまた無信仰でもある)に陥つたのは、デカルトが発見した近代的自我と直接的關係があつた問題であるとして、端的に次のように指摘していたことなのである。

デカルトがその方法的懷疑によつて、すべてのことを疑つた結果、遂に *cogito, ergo sum.* という命題を立て、そして自我をもつて絶対的に疑うことのできない確実な存在であるとしたことは周知の事実である。だが、このデカルトが発見した近代的自我とは、ヤスパースの指摘によれば、超越者や他者との交わりを欠いた孤立的、閉鎖的な自我に過ぎないものであつた。またその絶対的な確実性についてみても、他の事物存在について懷疑しうるとすれば、自我存在についてもまた十分に疑うことができる筈であり、それが確実だとされているのは片手落ちという外はない。⁽¹⁴⁾結局するのに、自我存在の確実性とは、一面では超越者との關係(デカルト自身もまたそうせざるをえなかつたように)において、他面では他我(特に実存的他我)との「交わりを」敢行することにおいて端的にその存在を確証しうることであつたのである。しかしそのためには、理性のもつ本来の意義を高調することが極めて大切なこととなるのであり、それにはデカルトの理性即ち悟性のように人間を孤独や孤高の中に閉じ込めるものなのでなく、「無際限の交わり」を求める「交わりの理性」とならなければならないことである。⁽¹⁵⁾と指摘していたのであつた。

以上におけるこうしたヤスパースの指摘は、別言するなら、また次のようにも表現しうることであらうか。つまりデカルトが発見した「われ疑う」のわれ(＝自我)とは、超越者や他我との交わりを欠如した孤立的、閉鎖的な自我に過ぎないものであると同

時に、しかもこの自我は、すべてのことを疑うために、一切のものを対象 Gegenstand として自己の前に立てる verstehen 処の技術的悟性 Verstand に外ならないものであったのである、と。そしてこの近代的自我が、このような孤立的、閉鎖的な自我であったと同時に、またそれが一切を対象化する（つまり、知ろうとするだけで信じようとはしない）ところの技術的悟性でもあったということによって、無信仰になると同時に、やがて近代人は自然の中に位置づけられていたところの人間の限界性を忘れ去ると共に、また他者の存在をも顧みることなくして、「自分のみが一切である」とする「ヒュブリス」にとりつかれてしまった理由があったのではなからうかと考えるのである。

それでは次に、「技術的悟性の絶対化」という問題に関して、ヤスパースのいうデカルト評を聞いてみることにしよう。

(i) デカルトは真理をもって端的に明晰判明なものとして規定していたが、これは彼が意識一般 Bewußtsein überhaupt 或いは悟性の立場における対象的認識のみをしか知らなかったことを意味している。それ故にヤスパースは、「デカルトにおいては、真理といえど何人に対しても強制的な普遍妥当性をもつものと仮定されていたために真理が分散した多様な意味をもちうることは、彼においてはおよそ問題とならなかった。従って彼は、包括者を意識一般と悟性とに局限していたのである」(傍点は筆者)と指摘していた。真理とは、ヤスパースによれば、単に意識一般或は悟性の段階でのものだけを意味しているのではない。その他にも現存在 Dasein 精神 Geist 実存 Existenz の段階でのものがあり、とりわけ実存の段階での真理は、「交わりの理性」によって不断に追求されなければならないことであつたのである。しかしこうしたことは、およそデカルトにおいては、問題となりえなかったというのであつた。

(ii) 科学は真理に関して単に悟性的、対象的真理を与えるのみであらう。しかもその真理とても、特殊の立場からする特殊の方法によって獲得された処の真理を意味していたのである。それ故に、真正の科学が常に個別的科学としての性格を備えなければならなかった所以なのであり、こうした立場からすれば、およそ普遍科学も普遍的方法もありえないことになるのであつた。ところがデカルトにおいては、かのガリレイとは異って、科学のもつこうした限界性を見失い、またその純粹性を忘却して、数学的自然科学によって普遍科学 Mathesis Universalis を構想していたのであつたが、それは独断的でありすぎるといふ点において、まさに「機械觀的神話」でしかありえないと批評していたのであつた。⁽¹⁷⁾

以上におけるこうしたヤスパースの批評からも窺いうるように、デカルトに内在していたこのような傾向は、近代

ヨーロッパにおける科学・技術の発達と共に、「誤れる啓蒙」ということの二つの柱であった、「技術的悟性の絶対化」という問題と同時に、「近代自我のヒュブリス」という問題を直接的に結果する原因となつてのではあるまいかと考えるのである。

それにまた、このデカルトは、あのベーコンと共に、近代における「対立の自然観」機械的自然観を醸成した源流でもあったことを考えてみるならば、近代ヨーロッパの「誤れる啓蒙」の道の演出者であったデカルトの主張する「対立の自然観」が、科学・技術の発達につれて漸次に優位性を占め、また支配的となつていったのも極めて当然なことであつたろうと考えるのである。とするならば、前節の終りにおいて引用しておいたようなグアルディーニの言葉は、端的にこうしたことの結果を説明していたものであると思われるのである。それでは、このデカルトの主張する「対立の自然観」とは、一体どのような自然観であつたのであるか。それを次節において問うことにしよう。

(三) 対立の自然観（機械的自然観）について

ヤスパースによれば、デカルトは「技術的效果への意志」の信奉者であつたといふ⁽¹⁸⁾。とするならば、こうしたデカルトが技術によって自然の支配ということを考えてたとしても別に不思議なことではなかつたであらう。事実、デカルトはこのような意味のことを、つまり彼は「思弁的哲学」を斥けると共に、また彼のいう「實際的哲学」によって人間は自然の主人公となりうるということを次のように指摘していたのである。

「学校で教える思弁的哲学の代りに、その概念から一つの實際的哲学を発見することができ、この哲学によって、火、水、空気、星、天の、その他、私どもをとりまくあらゆるものの勢力と作用を、私どもは判然と認識するのである。ちょうどそれは私ども職人たちにはそれぞれ独自の技能のあることが、何びとの眼にも判然と見わけられるのと

同じようなものである。かくても、ものもの、勢力ならびに作用を、それぞれに固有な用法において、私どもが用いることができ、私どもを自然界の主人にして、所有者のごときものとなしうることをこの哲学は私に示してくれるのである」⁽¹⁹⁾

(傍点は筆者)と。

以上におけるこうしたデカルトの言葉は、要約してみるならば、次のようにもいいうることであろうか。つまりデカルトは、彼が唱道する新しい「実際の哲学」によって、火や水や空気などの自然力を「あたかも職人が技能(＝技術)を用いるのと同じように」利用し、そのことによって人間は「自然の主人にして所有者となりうる」ことが可能となると語っていたのである。とするならば、私たちはこうしたデカルトの言葉の中に、端的に彼の考えている自然観、つまり技術による自然利用、自然支配は善であるとする対立の自然観をみてとれるのではないかと考えるのである。しかもこの技術による自然支配という自然観こそは、前節における補論の中でも少しく指摘しておいたように、デカルトが発見した近代的自我、つまり技術的悟性にとっては、まことに適当した自然観ではなかったかと思われるのである。何故なら技術的悟性としての *Verstand* とは、すべて一切のものを、従って自然をも知の対象として、自己の前に立てる *verstehen* ことにより、もってそれらを技術的に支配せんと意欲するものであったからに外ならない。とするならば、技術による自然支配という自然観とは、恩恵深い自然の中にいつくしみ抱かれている自己をみようとする調和の自然観(＝母なる自然観)とは異って、自然をも自己の前に立てることにより、もってそれを技術的に支配せんとする対立の自然観であったといいうることであろう。しかもこの対立の自然観が、既に第二節において指摘しておいた如く、近代ヨーロッパの歴史がヤスパースのいう「誤れる啓蒙」の道を歩んだこととも並行して、現代において支配的となり、そこから人間は自然の一員であるにも拘らず、自然の征服は科学・技術による人間自由の伸長を意味するものとして端的に善である、とする「近代的ヒュブリス」が広く深く一般化したのではあるま

いかと考えるのである。

それでは、こうしたことの結果として、一体どのようなことが生じたことであるといえるのだろうか。端的にいえば、現代においては、自然はもはや「母なる自然」といわれるような直接的なものではなくなって、「計算と装置とに媒介された間接的なもの」⁽²⁰⁾に、すなわち「直接性を失って、抽象的で型にはまったもの」⁽²¹⁾に、つまり「体験可能性を失って、即物的で技術的なもの」⁽²²⁾に、つまりグアルディーニのいう非自然的自然 *nicht-natürliche Natur* になり下ってしまったことであると思われる。思えば、かつての日における自然は、確かに「白日のものにおいて」も「神秘を秘めて」いたことである。しかもその神秘は「母なる自然」と呼びかけられるほどに、人間と通じ合っていたものなのであった。人間は自然の中に抱かれて生まれ、育ち、苦しみ、そして死んでいった。ともあれ自然とは、人間にとって恩恵を与えてくれる住みよいところであったのである。それがいまでは、自然はすっかり遠い存在となり、もはや直接の交渉をもって接することは不可能なものとなってしまったといえよう。それは既に、直観的思考によって把えられる余地はどこにもなく、かろうじて抽象的思考の対象となりうるものに過ぎないのである。つまり自然は、ますます「関係と機能とからなる一個の複雑な構造と化して、単に数学的記号でしか把えられないものとなってしまった」⁽²³⁾といえるであろう。そしてまた、こうしたことはかのデカルトが考えた普遍的科学 *Mathesis Universalis* にとつては、まさしく理想的なことでもあったといえる筈なのである。だがそれと同時に、自然は人間との親近性を喪失し、グアルディーニの指摘するように、自然が人間にとって何か心を許せないもの、危険なものに映つるようになってしまったことも事実ではないかと思われる。ということは、別言するなら、近代人はデカルトが演出した「誤れる啓蒙」の道を歩むことによって、「母なる自然観」という有機的自然観に代えて、「対立の自然観」という機械的自然観を採用したことなのであったが、それはまた近代文明が形成したところの社会的文化的なるものが、あまり

にも天与としての自然を蔑ろにした人工環境的なものになり過ぎていく過程を意味したことなのでもあったといえるのである。そしてそこには、人間と自然との乖離が急速に目立ってきたことが特色として指摘できるのである。

顧みてみれば、人間と自然との関係は、元来、人間が「自然の子」であったということにおいて密接不可分な関係にあったことはいうまでもあるまい。それは人間が自然の一部として、「人間の外なる自然」（いわゆる自然）と「人間の内なる自然」とが共に深く相通じていたものであったからに外ならない。それと同時に、人間はその精神において自然を超えうる存在として、つまり自然から独立したものととして文化を形成してきたことも事実なのである。とするならば、人間と自然と文化との正当な関係は、人間は自然の枠内において或る程度は自然を超えて文化を形成することが許されているということなのであろう。したがって、人間が「人間の外なる自然」に働きかけて形成するところの文化なるものも、当然、その性格として「天与としての自然」からあまり乖離するものは許されなかった筈なのである。しかし近代の技術的悟性は、近代における科学・技術の発達やまた技術的悟性絶対化の風潮に幻惑されて、人間が「自然の子」であるという限界性を忘却し去り、また「人間の外なる自然」を征服することは「人間の内なる自然」をも克服することに通じるという信念の下に、「天与としての自然」から出来るだけ乖離する処に、あえて人工的文化を築き上げようとする「ヒュブリス」に完全にとりつかれてきたといえることなのであった。そしてその結果として、ここに現代における深刻な自然破壊や汚染の問題が発生していたことなのであったが、それは端的にいうと、「天与としての自然」と「人工的文化」との極端な乖離という問題に帰着することなのであるということが出来るであらう。

このように、「技術的效果への意志」を強く内に秘めていたところの「対立の自然観」は、確かに現代における自然破壊や汚染の元凶であったものであると考えられるのである。とはいえ、それと同時に忘れられてならないこと

は、すでに指摘しておいた如く、「母なる自然」という自然観が、自然に対する甘えの態度を形成してきたことにおいて、逆に却って自然支配への意志、つまり「対立の自然観」を補強してきたという事実なのである。別言するならば、現代の自然破壊や汚染の問題には、このような自然に対する甘えと搾取という心理的態度がひめられていたということなのである。しかも、こうした心理的態度の形成には、すでに考察してきた如く、近代における二つの自然観が大いに関係していたことなのでもあった。とするならば、近代における二つの相反した自然観は、端的にいつて、相補的に現代における自然破壊や汚染の原点をなすものであった、といったとしても別段に過言ではあるまいと思われるのである。

結 語

以上においてみてきた如く、現代における自然破壊や汚染という深刻な問題が直接的には「対立の自然観」という自然支配の自然観によって、また間接的には「母なる自然」という自然に対する甘えの自然観によって醸成されてきたものであるとするならば、それではこの公害の問題を真に克服しうるためには一体どうすればよいのであろうか。そのためには、先ず「対立の自然観」の支柱となっていた「人間は自然の主人公である」という「ヒューブリス」や、また「科学・技術による自然の支配は善である」とする「技術的悟性絶対化」の考え方を是非にも打破する必要があるであろうと思われる。それは別言するなら、人間が元来「自然の子」であったという限界性を改めて想起することであると同時に、人間はこの大自然の枠内において、それとの調和を保ちながら如何にして限られた創造的自由を発揮して生きていくか、ということに関わることであったといえよう。とするならば、それは一面では「母なる自然」への復帰であるといえると同時に、他面では自然に対する甘えの態度（ロマンチズム）の完全な克服に通じる

ものがなければならぬ筈であろうと思われる。それならば、それは如何にして可能となることなのであるか。この問うとき、それは端的にいつて現代の文明がヤスパースのいう「真なる啓蒙」の方向性をとることにおいて初めて可能となるであろうと考える。何故なら、それは「真なる啓蒙」ということが次のような性格をもつものであったからに外ならない。

「真なる啓蒙とは、思惟と問う能力に対して企図的に外部から強制的に限界を示すことはないが、実際上の限界を自覚させるものである。何故なら、真なる啓蒙は単に従来疑われなかったことや先入見や自明的だと思ひ込まれていたことについて開明するだけでなく、自分自身についても開明するからである。こうした真なる啓蒙は、悟性の方法と人間存在の内容とを混同するということはない。しかもこの人間存在の内容は、啓蒙にとって合理的に営まれる悟性によって開明可能なものとして現われてくるが、しかし悟性に基礎をおくものではないのである」と。⁽²⁴⁾（傍点は筆者）

ここにヤスパースのいう「真なる啓蒙」ということの意味が端的に表明されていたことであろうと思われる。つまりそれは、人間自身についての開明であると同時に、しかもこの開明は人間性についての限界が自覚されることにおいて真に可能となろうということが意味されていたのであった。とするならば、現代文明はこうした「真なる啓蒙」の方向性をとることにおいて、つまり人間が自己能力の限界性において、自己自身についての開明を企図するという在り方をとることにおいて、近代文明が醸成してきたところの余りにも世俗的であると同時に人工的なものへの傾斜を、真に是正しうるものが可能であろうと考えるのである。何故なら、人間が自己能力に対する限界性を端的に意識するということは、それによって却って自己を限界づけているものに対する、即ち絶対の他者（つまり超越者）に対する覚知をうる可能的な道なのでもあったから、従ってこのことは、近代人が自然に対して抱いてきたところの

「ヒュブリス」や、また甘えの態度の克服などに端的につながる筈のものであらうと考えるからに外ならない。それにまた、この絶対の他者を覚知するということは、人間が自己の実存、Existenz に目覚めるということと別のことはありえなかつたのであるが、とすれば、それは端的に意識一般としての技術的悟性の立場（この立場の執着が近代文化の世俗化と人工化という問題を発生させた）を超越することにもつながる筈であらうと考えるからなのでもある。

* * *

ともあれ、公害時代などといわれる現代においては、「人間・自然・文化」という三者が相互に持ちつ持たれつを重ね無尽の縁起の係におかれていたということを改めて十分に自覚することが大切なことであらうと考える。そのためには、また現代文明のあり方が人間性についての限界を開明する「真なる啓蒙」としての文化のあり方へと脱皮しなくてはなるまいと思われるのである。

註 (1) Romano Guardini : Das Ende der Neuzeit. 1950. S. S. 76-77.

(2) ibid. S. 45.

(3)(4)(5) ibid. S. 44.

(6)(7) ibid. S. 45.

(8) ibid. S. 44.

(9) ibid. S. 61.

(10) Karl Jaspers : Einführung in die Philosophie. 1965. S. 85.

(11) ibid. S. 88.

(12) Karl Jaspers : Vom Ursprung und Ziel der Geschichte. 1966. S. S. 121-123.

- (13) Karl Jaspers : Einführung in die Philosophie. 1965. S. S. 86-87.
- (14) Karl Jaspers : Descartes und die Philosophie. 2Aufl. 1948. S. 14.
- (15) *ibid.* S. 104.
- (16) *ibid.* S. 25.
- (17) *ibid.* S. 97.
- (18) *ibid.* S. 60.
- (19) デカルト方法序説 昭和三十一年岩波文庫 七五頁
- (20) Romano Guardini : Das Ende der Neuzeit. 1950. S. 75.
- (21) ~~(22)~~ *ibid.* S. 75.
- (23) *ibid.* S. 77.
- (24) Karl Jaspers : Einführung in die Philosophie. 1965. S. 87.